

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	組織神学 専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学研究科組織神学専攻・教授	小河 陽	印
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	アタナシオスの『アレイオス派駁論Ⅲ』第 58～67 章における神の善性		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科組織神学専攻博士課程後期課程 4 年	安井 聖	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300 字で記入, 図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、アタナシオスが『アレイオス派駁論Ⅲ』第 58～67 章において「神の善性 (avgao, thj)」の用例が集中的に見られることに注目をし、まずその箇所においてどのような「神の善性」についての理解が論じられているかを詳細に明示する。さらに『アレイオス派駁論Ⅰ～Ⅲ』全体のコンテキストにおいて、特にアレイオス論争との関わりにおいて、当該箇所における「神の善性」の理解がどのような役割を果たしているかを明らかにすることを旨とする。

またアタナシオスの最初期の主要な神学的著作である『異教徒駁論』と『言 (ロゴス) の受肉』における「神の善性」についての理解と比較対照しながら、それらを通じて見えてくるアタナシオスの「神の善性」の理解を明らかにすることを旨とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[アタナシオス] [神の善性] [アレイオス論争]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

アタナシオスの最初期の主要な神学的著作である『異教徒駁論』と『言(ロゴス)の受肉』における「神の善性」の理解の特色については、これまでにすでに考察した(Cf, 「アタナシオスの『異教徒駁論』における神の善性に基づく自己啓示」, 『キリスト教学』第47号, 立教大学キリスト教学会, 2005年; 「アタナシオスの『言の受肉』における神の善性」, 日本基督教学会第54回学術大会における研究発表)。アタナシオスの全著作中, 神の善性という用語(*avgao, j, avgao, thj*)はこの二つの書物の中に多用されているが、それと共に『アレイオス派駁論』、特にその第3巻第58~67章に頻出している(Cf, Müller, G., *Lexicon Athanasianum*, Berlin, 1952, S.2-3)。したがって『アレイオス派駁論Ⅲ』第58~67章においてアタナシオスが「神の善性」という用語をどのように理解して用いているかを明らかにすることは、アタナシオス神学全体の中での神の善性の理解の特色を明らかにするための重要な課題である。

そこでまず『アレイオス派駁論Ⅲ』第58~67章が、『アレイオス派駁論』全三巻の中でどのような内容的な位置を持っているのかを明らかにする。アタナシオスは本書の議論を次のように進めている。すなわち最初にアレイオス派の教理を説明した後に(第1巻第1~10章)、第一にアタナシオスは「御子キリストが存在しなかった時があった」とのアレイオス派の主張に対して反駁する。すなわち御子は父なる神と同様に永遠なるお方であり(第1巻第11~13章)、また神の御子は父なる神の本性から生み出されたお方なのであり(第1巻第14~16章)、ロゴスなる御子を否定することは神、創造者、三位一体を否定することと同じなのである(第1巻第17~22章)。第二にアタナシオスはアレイオス派の四つの問いに答える。その問いとは「神は存在しなかったものや存在したものを無から造ったのか」(第1巻第23~26章)、「御子は造られる前に存在したのか」(第1巻第26~29章)、「存在するようになったわけではないお方はただお一人だけか、二人おられるのか」(第1巻第30~34章)、「自由意志を授けられて、ロゴスは変えることのできる本性を持たないのか」(第1巻第35~52章)というものであり、アタナシオスはその一つ一つに丁寧に答えていく。第三にアタナシオスはアレイオス派の四つの聖書釈義に対して反駁する。その四つの聖書釈義とは、ヘブライ人への手紙第1章4節の「御子は、天使たちより優れた者となりました」という箇所(第1巻第54~64章)、同じくヘブライ人への手紙第3章2節の「イエスは、御自身を立てた方に忠実であられました」という箇所(第2巻第1~11章)、また使徒言行録第2章36節の「イエスを、神は主として、またメシアとなさったのです」という箇所(第2巻第11~18章)、そして箴言第8章22節の「主は、その道の初めにわたしを造られた」という箇所(第2巻第18~82章)についてのものである。第四にアタナシオスはヨハネによる福音書の三つの箇所の真実の意味を説き明かす。その三つの箇所とは、第14章10節の「わたしは父の内におり、父はわたしの内におられる」という箇所(第3巻第3~9章)、第10章30節の「わたしと父とは一つである」という箇所(第3巻第10~16章)、第17章11節の「わたしたちのように、彼らも一つとなるためです」という箇所(第3巻第17~25章)である。第五にアタナシオスは神の御子について述べられている人間としての弱さの真実の意味を説き明かす。このようにアタナシオスは『アレイオス派駁論』全体を通じて、御子の神性を自らの聖書解釈によって否定するアレイオス派に対して、同様に自らの聖書解釈を示すことによって反駁し、御子が真の神であられることを論証しようとする。そしてまさに『アレイオス派駁論Ⅲ』第58~67章は、このように議論を進めてきた本書の最後の結論部分なのである(Cf, Rousseau, A. et Lafontaine, R., *Athanase d'Alexandrie. Les Trois Discours contre les Ariens*, Bruxelles, 2004)。

この箇所でアタナシオスは、御子の存在が神の意志に由来すると考えるアレイオス派の主張を論駁する。すなわちアレイオス派はヴァレンティノス派の主張を用いて、神は第一に思考し、それに続けて意志するのであり、神は自ら思考したものを意志を加えることなしに表出することをしない、と述べる。そしてもし神が一方において被造物をご自分の

研究成果の概要 つづき

意志に基づいて創造し、他方において御子をご自分の意志に由来させないのであるとすれば、それは不変であるはずの神が変化することになり、神にふさわしくないことだ、と主張する(第3巻第60章)。これに対してアタナシオスは、御子は神の本性に由来する存在なのであり、御子の誕生の前に神の意志があつてこれに基づいてお生まれになったのではない、と反論する。そしてアレイオス派が御子は神の意志に基づいて生まれたと述べることによって、御子が存在しない時があつたことを主張しようとしていること(第1巻第11~22章)を批判し、御子は父なる神と共に存在する永遠者であつてこのお方が存在しない時などはないと主張する(第3巻第61章)。そこでアレイオス派は、もし御子が神の意志に由来する存在でないのであれば、神は御子をご自分の意志に逆らつて必然的に生んだことになるのであり、神が必然性に縛られることは不当だ、と反論する。そしてアタナシオスはまさにこの議論を反駁するために、神の善性について言及する。すなわち神の善性はその本性に基づくものではあるが、これによって神を必然性で縛ることになるわけではない。神の善性の場合と同様に、御子が神の本性に由来する存在であると述べても、それは神にふさわしいことなのである(第3巻第62章)。ここで興味深いのはアタナシオスが御子と神の善性とを並行させて論じていることである。

さらにアタナシオスは、箴言第8章12節を説き明かしながら、御子こそが神の生きた意志そのものである、という議論を展開する(第3巻第63章)。そしてすべてのものは神の意志である御子なるロゴスによって創造されたのであるから、御子はそれら被造物の外にあるお方である(第3巻第64章)。さらにアレイオス派が、御子の存在が神の意志に由来しないのであれば、御子は父なる神と無関係の存在となる、と批判することに対して、アタナシオスは再び神の善性を引き合いに出して議論する。すなわち神はその意志に基づいて善であるのではなく、その本性に基づいて善であられるが、同時に神の善性はその意志と深く結び付いている。同様に御子は神の意志に基づいて生まれたのではないが、神の意志に反して存在するわけでは決してない。御子は神の生ける意志そのものなのであり、そのような仕方では神の意志と御子の存在は結び付いているのである(第3巻第66章)。

そしてこの議論にこそ、アタナシオスが御子と神の善性とを並行させて論じることのできた理由がある。すなわち神の御子なるロゴスは、神の善なる意志に他ならないのである。そしてここにこそ、神の善性についてのアタナシオスとオリゲネスとの理解の相違点がある。すなわちオリゲネスは神が善であるからこそ永遠の創造者であり、これと結び付いて被造物の存在の永遠性を主張した。そのようにオリゲネスは神の経綸における善性の永遠性を、被造物の永遠性と結び付けて論証しようとした。けれどもこのようなオリゲネスの理解は、まさにこの箇所ではアレイオス派がアタナシオスは神を必然性で縛り付けていると批判したが、その批判を向けられても反論できない問題を抱えている。すなわち被造物に対する神の善性が、被造物の存在を永遠化することによって必然化されてしまう(Cf. 拙著, 「中期プラトン主義とオリゲネスにおける神の善性」, 『キリスト教と文化』第6号, 関東学院大学キリスト教と文化研究所, 2008年, p.144)。これに対してアタナシオスは、神の善性はその本性に基づくとしながら、決して必然化されてしまうものではない、と主張する。なぜならアタナシオスはオリゲネスと異なり、神の経綸の永遠なる善性を御子の存在と結び付けたのである。生きた神の意志そのものである御子が永遠の存在であるからこそ、神は永遠に善をもって被造物と関わってくださる。しかしその神の善なる意志はいつも三位一体の神の側にその根拠を持つものであり、だからこそいつも神の主権と自由に根ざすものなのである(Cf. Anatolios, K., "Theology and Economy in Origen and Athanasius", *Origeniana Septima*, 1999)。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名, 論文標題, 雑誌名, 巻号, 発行年, ページ)
- ②図書 (著者名, 出版社, 書名, 発行年, 総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名, 開催日, 開催場所)
- ④その他 (学会発表, 研究報告書の印刷等)

現在のところ、本研究に関する発表はしていません。今後雑誌論文への投稿、学会発表等で成果を発表したいと考えています。